

第6回 宗門教学会議 開催報告（前半）

誰一人取り残さない

— 本願寺派 × ^{エスディージーズ}SDGs —

二〇一七年十月十八日、第六回宗門教学会議が開催されました。今回のテーマは、「誰一人取り残さない——本願寺派×SDGs」です。

ご門主は、伝灯奉告法要に際してご親教「念仏者の生き方」を述べられました。「念仏者の生き方」の中では、テロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、人類の生存にかかわる世界規模の課題を挙げられた上で、「国の内外、あらゆる人びとに阿弥陀如来の智慧と慈悲を正しく、わかりやすく伝え、そのお心にかなうよう私たち一人ひとりが行動することにより、自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現に努めたいと思います。世界の幸せのため、実践運動の推進を通し、ともに確かな歩みを進めてまいりましょう」と述べられています。

宗門教学会議は、宗門内外から提起される現代的課題や問題について、先験的知見を有する有識者からご提言をいただき、宗教者の持つ知見が現代社会において、どのような位置にあり、よりよい社会の創造のためにいかなる役割を果たし得るか、宗門の確たる方向性を考えていく会議と位置づけられています。そこで、二〇一五年にニューヨーク国連本部で開催されたサミットにおいて全会一致で採択されたSDGs (Sustainable Development Goals) をテーマとして取り上げ、宗門の活動に還元すべく会議を開催いたしました。

第六回宗門教学会議では、ご門主ご臨席のもと、会議委員として国連広報センター所長の根本かおる氏、一般財団法人グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン代表理事の有馬利男氏、水谷青少年問題研究所所長の水谷修氏、勸学寮頭の徳永一道氏をお招きしました。当日の司会は座長も務める本願寺派総合研究所長の丘山願海が担当しました。

なお、報告は今号と次号の二回にわけて行い、今号は先生方のご発題を報告いたします。

「宗門教学会議」総長あいさつ

本日は、ようこそ宗門教学会議へご参集くださいました。

この宗門教学会議は、宗門が当面する諸問題や宗門内外から提起される現代的課題、および種々の問題等について、先験的知見を有する有識者から動向の把握・分析とご提言をいただき、宗教者の持つ知見が、現代社会においてどのような位置にあり、よりよい社会の創造のためにいかなる役割を果たし得るか、宗門の確たる方向性を考えていく上で重要な会議として位置付けられております。

本日のテーマは「誰一人取り残さない——本願寺派×SDGs」です。伝灯奉告法要の折、ご門主は、ご親教「念仏者の生き方」において、自らお念仏に生き、より多くの人々にその尊さを伝えるとともに、「仏法を依りどころとして生きていくことで、私たちは他者の喜びを自らの喜びとし、他者の苦しみを自らの

苦しみとするなど、少しでも仏さまのお心になう生き方を目指し、精一杯努力させていただく人間になるのです」とお述べになり、念仏者として、テロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧^{よくあつ}など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題の解決に寄与することの重要性をお示しになりました。

「念仏者の生き方」のご教示を受け、現在、宗門では、宗門総合振興計画に示される基本方針、仏教の精神に基づく社会への貢献のもと、平和問題、人権問題など、多様な社会の諸問題解決のための取り組みに力を注^{そと}いでおります。

他方、世界では、二〇一五年にニューヨークの国連本部で開催されたサミットにおいて、地球社会の持続可能な開発目標であるSDGs (Sustainable Development Goals) が採択されました。以

降、国連加盟国は、誰一人取り残さないという理念のもと、貧困、飢餓、教育、安全な水、環境問題などの十七の目標を掲^かげ、課題解決のための取り組みが行われていると聞いております。

私たち浄土真宗のご本尊である阿弥陀如来は、生きとし生けるもの全てに対し、慈悲の心を持つて救うと誓われ、その誓いを成就^{じょうじゅ}された仏さまです。こうした全ての人々の幸福を願う阿弥陀如来のご本願は、「誰一人取り残さない」を理念とするSDGsの目指す方向性と軌を一にするものであると言えます。

人間は、どこまでも自己中心の欲望から抜け出せない、不完全な存在であります。その事実を見据えつつ、なお現実の諸問題から目を背^{そむ}けることなく、他者と共に心豊かに生きる、また、心豊かな生を全うできるよう行動することが大切であります。

一人ひとりが問題解決のための活動主体となり、おのおのの立場や思想の垣根を越えて協働することで、世界の苦悩の

「誰一人取り残さない——本願寺派×SDGs」設定の意図

（丘山） 会議の趣旨について説明いたします。SDGsは「持続可能な開発目標」と日本語訳されていますが、私は、

人類の危機にあるこの地球社会を将来世代に向かって持続させていくために、人類共通で解決のために努力していく目標だと理解しています。

そして、SDGsの根本的な理念は「No one will be left behind」誰一人取り残さない、または誰一人取り残されない

解決に寄与していかなければならないのでありましょう。そのため、SDGsについての学びを深め、さらに苦悩の現場で活躍されている方々の声を聞かせていただき、本日の宗門教学会議を開催させていただいたことあります。

本日の議論が、宗門の具体的施策、ま

た、世界的諸課題の解決の取り組みの機縁となりますことを切に念じております。ご多用の中、ご参集いただきまして、根本かおる先生、有馬利男先生、水谷修先生、徳永一道勸学寮寮頭に、深く

ごころから感謝、御礼を申しあげます。本会議の重要性をご理解賜りまして、

ということを掲げています。これは、大乘仏教でいわれる一切衆生が共に生きていく、人のために生きていくという考

えに通ずるものだ理解しています。つまり、地球社会で、誰一人も取り残されることなく、こころ安らかに生きていく、そういう社会をいかに実現していくかというSDGsの目標は、本願のみ教えに共通していると考えています。

SDGsは、日本も含め、世界各国で

宗門の新たな未来を切り開くためにお知らせをお貸しく、ださいますようお願い申し上げます。あいさつとさせていただきます。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

取り組みがはじめられています。こうしたSDGsの理念やSDGsにもとづく活動を学ぶことは、今後の宗門の一つの参考軸になり得るのではないかと。また、宗門内の活動をより活性化していくこともできるのではないかと。あるいは宗門内の活動がSDGsに取り組む国連や企業、NPO法人を通して、様々なネットワークと共にやっていけるのではないかと期待し、本年の宗門教学会議のテーマを設定しました。

発題一

根本かおる氏

「誰も置き去りにしない！世界の共通言語 SDGsを自分語化して、世界を変革する」

根本かおる氏には、SDGsが採択された背景、特徴などSDGsの概要を説明いただきました。

はじめにSDGsが採択された背景について根本氏は、SDGsが「反省」「危機感」の中から生まれたことを強調されました。「反省」「危機感」とは、SDGsの前身にあたるMDGs (Millennium Development Goals) の成果を受けての言葉です。MDGsは二〇〇一年に採択され、二〇一五年までに貧困人口・飢餓人口の半減、乳幼児死亡率の削減など、途上国の社会課題の解決を目指したものでした。こうした活動は大きな成果を達成した反面、主にサハラ砂漠以南のアフリカなどでは目標を達成できず、積み残した課題も多くありました。また同

時に、発想を変革する必要性も認識されました。従来の発想は、平均値で考えられていましたが、平均値で考える方法では、上限の値が上昇していけば、下限の値が減少しようと、あるいは変化が起きなくとも数字上は平均値の上昇がおこってしまうのです。そうだとすれば、下限、すなわち社会的弱者、脆弱な立場にある人たちは置き去りにされてしまいます。つまり、これまでの発想、活動では置き去りにされてしまう人々がいたという「反省」、そして、貧困、格差、気候変動など、このままでいけば地球は持続できなくなる、立ち行かなくなるという強い「危機感」からSDGsが国連において全会一致で採択されたことが指摘されました。

世界規模の課題に取り組むSDGsの

SUSTAINABLE GOALS
DEVELOPMENT
17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

地球はいま持続可能でなくなっている！
世界を変革するための17の目標、SDGs



SUSTAINABLE GOALS
DEVELOPMENT
世界を変えるための17の目標



特徴は、取り上げられた十七の目標がつながっているということです。例えば、女子教育を取り上げますと、直接的に関わるのは「目標四 質の高い教育をみんなに」「目標五 ジェンダー平等を實現しよう」です。教育を受けた女性は、より高い収入で働きがいのある仕事に就くことができると考えられるので、「目標一 貧困をなくそう」「八 働きがいも



経済成長も」に関わります。また、教育を受けた女性が母親になった際、より健康やかに子どもを育て、栄養のある食事を提供できるということで、「目標二 飢餓をゼロに」「目標三 すべての人に健康と福祉を」が関わります。また、教育を受けることで賢い消費者になれるということと、「目標十二 つくる責任つかう責任」、また、女子教育は不平等の是正につながるということで、「目標十人や国の不平等をなくそう」、そして、和平交渉にも自信を持って参画できるということで、「目標十六 平和と公正をすべての人々に」にも関わります。こう

した目標それぞれの相関性については日本でも研究が行われています。

他の特徴としては、フォローアップのメカニズムが挙げられます。毎年七月に国連本部でそれぞれの加盟国が自主的に、「うちは、ここまで達成しています」「これから、こういうふうに進めていく計画です」ということを発表する場があります。そして、四年に一度、次は二〇一九年になりますが、こうした発表を首脳レベルで行います。日本政府は、安倍総理を本部長とするSDGs推進本部を、昨年の伊勢志摩G7サミットの前につくり、実施指針も去年の十二月にま

根本かおる氏

【略歴】

東京大学法学部卒業。一九九六年から二〇一一年末まで国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）にて、アジア、アフリカなどで難民支援活動に従事。ジュネーブ本部では政策立案、民間部門からの活動資金調達のコーディネートを担当。WFP国連世界食糧計画広報官、国連UNHCR協会事務局局長も歴任。フリー・ジャーナリストを経て二〇一三年八月より国際連合広報センター所長へ就任。





SUSTAINABLE GOALS
17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD

地球は子どもたちからの借り物です



地球を持続可能な形で
将来世代につないでいく必要があります

とめています。

SDGsは二〇三〇年を目標年としていますが、日本で達成できているものは教育、経済成長、技術や産業革新だけだと言われています。その他の分野で大きな成果を上げようとすれば、オール・ジャパンで取り組む必要があります。そうした際、宗教者の果たす役割は、残念ながら排除、排斥、閉鎖という方向に向か

っている現代の人々の心を、異なるものに対して心をオープンにすることになり、そうした寛容の精神の醸成を人々に訴えかけて欲しいと思います。
最後に、根本氏の言葉を引用し報告といたします。

発題二 有馬利男氏

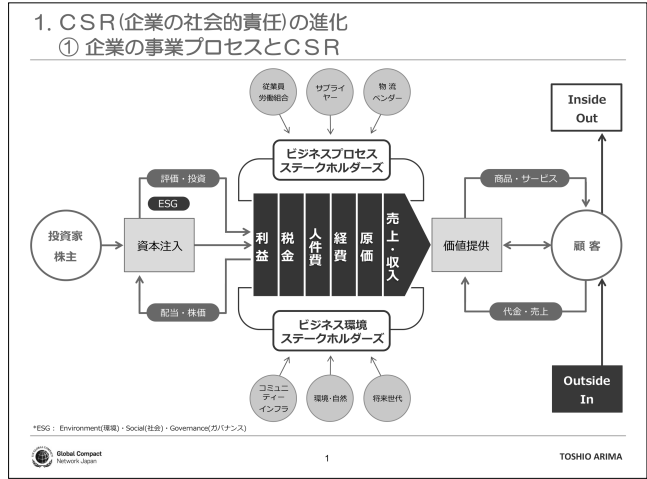
「持続可能なSDGs」

有馬利男氏には、SDGsについて企業はどのように考え活動しているのか、何が課題であるのか、についてお話しただきました。

有馬氏は、企業の社会的役割・責任が変化してきたことを最初に説明されました。これまで長く、企業の社会的責任(CSR)とは、企業に資本を注入してもらい、商品を提供し、売り上げ、利益を上げて、利益を分配する。また、利益の中から、例えばある部分を寄付すると

「地球は、子どもたちからの借り物の、未来からの借りものと言います。だからこそ、私たちには、この地球を次の世代に美しいものとしてつないでいく責任があります。どうぞ皆さまのお力をお貸しください。お願いいたします」

いったことが一般的だと考えられてきました。しかし、近年ではそうした企業の流れを可能にしている条件、ビジネスのプロセス、ビジネスの環境といったことが注目されています。例えば、商品をつくる際に工場で騒音を立てない、通勤の際も車で街中をあふれ返さない、工場の排水で汚染をしない、といったことが大変厳しく議論をされるようになっていきます。ただストリートに売り上げや利益の分配というだけでなく、企業の活動の過程において「社会に迷惑を掛けない」



ということが社会的責任として指摘されているのです。

また、CSV (Creating Shared Value) という考え方も盛んに議論されています。これは、ビジネスのプロセス、環境だけではなく、顧客に価値を提供する。そして、価値を提供するときに、価値そのものを社会的な意味のあるものにしよう、価値をつくって社会とシェアをするということなんです。例えば、富士ゼロックスでは、事務機、複写機を顧客のオフィスに置いていますが、この時、顧客が最も効率的な仕事ができる、最も少ないスペースで、最も少ない電力で使える方法はないか。そういう検討をして顧客に提案をしています。そうすると、顧客のコストダウン、またエネルギーの削減に寄

与することとなり、大きな意味での社会的な価値を提供することになるのです。このように新たな需要、新たな提案を提示することで、サステイナブルな、持続的なビジネスを展開しようとしています。

では、企業がSDGsを取り入れる意義ですが、企業である限りビジネスとして成立しなければなりません。では、どういうビジネスがあるかということですが、ヨーロッパのある調査会社が行った調査資料では、世界全体の数字ですが、「目標四 質の高い教育をみんなに」から引き起こされる新しいビジネスチャンスは二四兆円という予測があります。例えばMOOCという、大規模なネットでの、公開方式の教育システムがありま

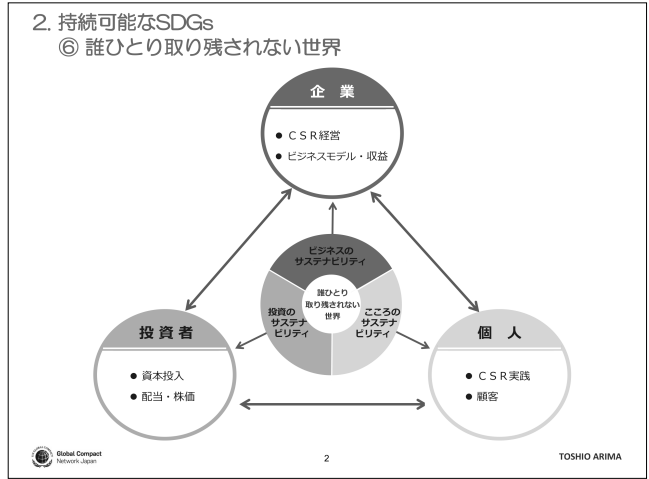
有馬利男氏

【略歴】

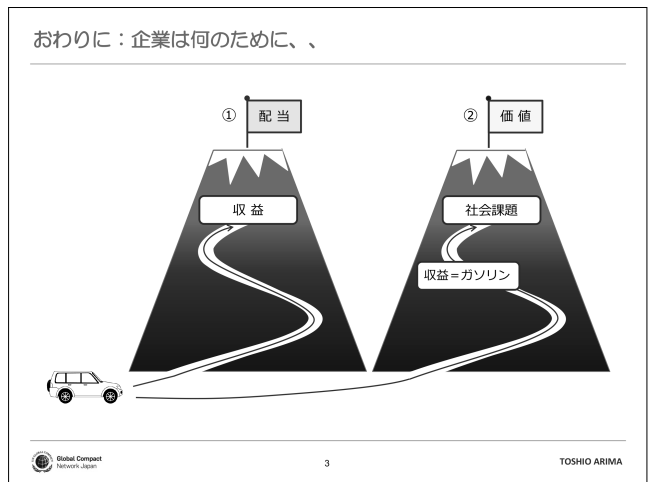
一般社団法人グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン代表理事。元富士ゼロックス(株)代表取締役社長。

す。アフリカのへき地で、教室も教科書も先生もいないところの生徒が大変高名で優れた先生の授業をネットで受け、勉強できるわけです。こうしたことが世界中で今は広がりつつあります。韓国のサムスは「スマートクラス」と称して、教育の世界に入ろうとしています。

SDGsに関して、先ほどのような大きな数字がたくさん出て来ていますが、



問題は、教育の例でいえば、今後、五年、十年、十五年後も本当に持続できるような、本当の意味での、教育の仕組みがつくれるのだろうかということです。そこを考えると、企業だけの力では、あるいはITのシステムを突っ込んで大型投資をしただけでは、本当の意味で持続可能なシステム、仕組みにはならない。つまり、人のこころの中のサステイナビ



リティーをどう考えるかという、その部分に踏み込んでいかないと、企業の一人ひとりが変わっていかないと、実は本当の意味での持続可能な仕組みにはならないと思っています。

最後に、有馬氏がゼロックス・コーポレーションの創業者ジョー・ウィルソンの言葉を引用して述べられた言葉を掲載し報告いたします。

『われわれのビジネスの目的は、よりよいコミュニケーションをお客さまに提供することなのだ』。よりよいコミュニケーション。これが複写機から今はビジネスのソリューションにつながっています。ただ、それがすべてではなくて、そのことを通じて人間社会のよりよい理解をもたらす。これが究極の目的です」

発題三

水谷 修氏



水谷修氏には、夜回り先生として活動された経験をもとに、現在の日本に存在する危機的な状況を踏まえ、宗教団体、宗教者に対するご提言をいただきました。

水谷氏は、十七年前に「まったく新しいタイプの問題を抱える子どもたち——暗い部屋で明日を見失い、自らを傷つけ、

死へと向かい、夜眠れない子どもたち——」が多数存在することに気づき、水谷青少年問題研究所を創設され、現在までに、四三万という多くの子どもたちと関わってこれました。水谷氏は、「夜眠れない子ども」が多数存在するような現在の社会ができあがってしまった理由として三点指摘されました。第一に、戦後の個人主義の発達とバブル経済の中で物欲主義がはびこってしまったこと、第二に、バブル崩壊後の不況により、社会全体のイライラが最も弱い子どもに向けられてしまっていること、第三に文明の発達により人間が体を使わなくなっ

まったこと、です。このような現代社会から投げかけられる問題として、いじめ・不登校・引きこもり・こころの病（リストカット、自殺、非行、犯罪、薬物乱用）が挙げられました。また、日本では現在一二〇万人がうつ病の認定を受け、一一〇〇万人がこころを病み、心療内科・精神科・神経科で治療を受けている現実があることを指摘されました。

こうした状況、特にこころを病む人々に対してどのような対応をすべきか。水谷氏は、日本が世界で唯一複数の薬を投与している現状や、抗薬物の書籍執筆の経験から、安易に薬物を投与していくような方法ではなく、「なぜ眠れないのか」「なぜ死にたいのか」「なぜイライラするのか」「なぜ誰かを傷つけたくなるのか」

水谷 修氏

【略歴】

水谷青少年問題研究所所長。元高等学校教諭、児童福祉運動家、教育評論家。花園大学社会福祉学部臨床心理学科客員教授、上智大学文学部哲学科非常勤講師。

か」、その原因を探り、原因を問うことまで行う必要があると指摘されました。こうした対応の方法として、水谷氏は二つの方法を提示されました。一つは、こころの病、特に後天的なこころの病の要因がこころと身体との分離にあることから、健全な肉体、健全な生活が必要であり、いかに規則正しい生活をするかにすべてが懸かっているということです。もう一つ挙げられたのが宗教の力です。不登校・引きこもりの子どもが寺院や宗教施設で生活すると、学校への戻りが早くなったり、リストカットができないといった事例を紹介されました。また、日本では古来、寺院は役所としての仕事だけでなく、児童養護施設の運営、病んでいく人への対応をしてきたように具体的な社会活動を行ってきた歴史があります。仏教が二千年以上にわたって生き残ってきたのは、衆生、あらゆる人々の迷えるこころを本当に救ってきたからであり、それが宗教の力ではないのか、と指摘されました。

最後に、水谷氏から宗教者へ向けられたメッセージを引用して報告といたします。

「どの子が好きこのんで暗い夜の部屋で自らを傷つけ、死へと向かいますか。どの子が好きこのんで暗い通りをさまよったり、暴れますか。本当はどの子も、父さん、母さんのいる温かい家庭で生きたい。本当はどの子も、温かい優しい先生がいっぱいの学校で勉強したい。夜の世界の子どもたちは捨てられた子どもたちです」

「ぜひ地元の子どもたちに笑顔と優しさを与えるお寺をつくってください」

(総合研究所 教団総合研究室)